丁寧体の会話における日本語母語話者の音声転訛

ボイクマン　総子

要　旨

日本語の話しことばにおいては、同一と認められる語句が異なる複数の音形を持って現れることがある。それらは縮約形、拡張形と呼ばれるが、本稿ではそれらを転訛形と呼ぶ。本研究では、丁寧体基調の会話における40名の日本語母語話者の転訛形について、それぞれの転訛形が原形と比べどの程度使用されているのか、そして、転訛形によって改まり度にどのような違いがあるのかについて調査分析した。

その結果、転訛形によって次の４つのレベル ― 1.原形の使用は非常に少なく転訛形が基本であるもの（「のだ→んだ」等）、2.転訛形が原形の使用を上回り、改まり度が落ちることがないもの（「ている→てる」等）、3.転訛形の使用率は原形ほど多くなく、改まり度がやや落ちるもの（「ところ→とこ」等）、4.転訛形の使用率は低く改まり度が落ちるもの（「やはり→やっぱ」等）―があることがわかった。また、同形の音声転訛であっても、文法的な違いにより使用率や改まり度が異なることも明らかになった。

【キーワード】転訛形　縮約形　拡張形　丁寧体の会話　改まり度

Transformed Sounds in Polite Style Conversations among Japanese Native Speakers

BEUCKMANN Fusako

【Abstract】In Japanese spoken language, the same words and phrases can appear with forms of different sounds. These forms are known as contracted / extended forms. In this study, we introduce the term “transformed sounds” of words and phrases for these forms. Based on analysis of forty Japanese native speakers’ conversations in polite style, we clarify how frequently the transformed sounds are used and how the formality level changes compared to the original form. In this study four different categories of transformed sounds could be distinguished : 1. transformed sounds are almost exclusively used without any influence on formality (e.g. -noda → -nda), 2. usage rate is higher than the full form and formality is not affected (e.g. -teiru → -teru), 3. usage rate is moderate and formality level is somewhat lowered (e.g. -tokoro → -toko), 4. very infrequent usage and formality level is lowered (e.g. yahari → yappa). We also demonstrate that the same sound can differ in usage rate and formality level depending on grammatical context.

【Keywords】transformed sounds, contracted forms, extended forms, polite style conversation, formality level

１．はじめに

日本語の話しことばにおいては、「では」が「じゃ」、「のだ」が「んだ」になるというように音が変化する場合がある。そのほとんどが元の形（以下、原形と呼ぶ）よりも短くなっていることから、これら変化した形は一般に縮約形と呼ばれている。また、縮約形がインフォーマルな場面だけでなくフォーマルな場面でも頻繁に現れることは、日本語母語話者の使用実態を調査した研究によっても実証されている（土岐 1975、堀口 1988、上原・福島 2005）。ただし、縮約形がフォーマルな場面でも用いられると言っても、縮約された形から受ける改まりの程度は、次の例に示すように一様ではない。

⑴　やはり、丁寧に話してしまうんです。
⑵　やっぱ、丁寧に話しちゃいますんで。（上原・福島（2005）より引用）

上述の２例はいずれも丁寧体基調の話しことばである。⑴は「のです」の縮約形「んです」が使用されているが、それによってくだけた印象になるとは感じられない。それに対し、⑵の「やっぱ」は改まり度が明らかに落ち、「ちゃう」「んで」もやや改まりに欠けるように感じる。このように、縮約形によって改まりの程度が異なるようであるということは印象としては言えるが、果たしてその使用実態はどうなのであろうか。また、日本語教育においては、原形に対してどのような形に転訛するかだけでなく、どのような状況で使用されるのかについても説明されなければ、学習者がそれらを適切に使用することは難しいであろう。そのためには、まず使用の実態を調査する必要がある。

丁寧体のデータを基に縮約形の使用実態を調査した先行研究には、堀口（1988）と上原・福島（2005）がある。上原・福島（2005）は、原形に対して転訛した形にはどのようなものがあるのか、そしてそれらがどの程度使用されているのかを調査分析し、丁寧体の会話の中でも、ごく普通に使用されるものからほとんど使用されないものまで様々なレベルがあることを指摘している。しかし、上原・福島（2005）のデータは、８名という限られた人数のデータであり個人差を排除できないという問題がある。また、堀口（1988）は52名（延べ54名）を対象にしているが、使用者率については言及がない。

そこで、本稿では40名のデータを基に、かつ、日本語教育への応用を考慮し、調査対象の表現を広げ、丁寧体基調の話しことばにおける日本語母語話者の音声転訛の実態（使用率、及び使用者率）を調査することにした。本研究は、堀口（1988）と上原・福島（2005）の研究を補完するものとして位置づけたい。

２．先行研究

縮約形の定義には、齋藤（1991）がある。齋藤（1991）は大坪（1982）などの先行研究を

もとに縮約形を次のように定義している。

> 現代日本語において、同一と認められる語（句）が異なった複数の音形を持って現れるとき、その音形間の関係において次のいずれかの音声的過程が認められた場合、それの認められた方の形を「縮約形」と呼ぶ。
>
> a．音節数の減少（音節の脱落・融合）
> b．音数の減少　（単音の脱落）
> c．音量の減少　（音の長さの短縮）　（斉藤 1991：92）

縮約形の例としては、「a.じゃ（←では），んで（←ので）」「b.てる（←ている），けど（←けれども）」「c．ほんと（←ほんとう），でしょ（←でしょう）」がある。広い意味では「daara（←だから）」のように「発話の速度が速くなったなどのために、主に生理的な理由で生じたもの」（斉藤 1991：93）も縮約に含まれるが、本稿では考察の対象外とする。

上原・福島（2005）は、原形に対する音の変化には「減少」だけでなく、「増加」も見られるため、上述の齋藤（1991）の定義のａからｃの「減少」を「増加」に読み替えたものを「拡張形」と名付け、「縮約形」と「拡張形」の総称を「くだけた表現」としている。拡張形の例としては「と」「やはり」に対する「って」「やっぱり」を挙げている。

本稿では、齋藤（1991）と上原・福島（2005）の縮約形と拡張形の定義を用い、これに当てはまるもの、さらに「なんと」が「なんて」となるように音節が変化するもの、すなわち、「現代日本語において同一と認められる語（句）が異なった複数の音形を持って現れるもの」を考察の対象とするが、これらを原形に対する音の「転訛形」と呼ぶことにする。例えば、原形「というのは」に対する「っていうのは」は拡張形となるが、「ってのは」「って」という形になると原形/拡張形からの音数の減少となり、単純に「減少」「増加」と捉えられないからである。また、上原・福島（2005）で用いられている「くだけた表現」ということばには「インフォーマル、カジュアルな」という意味が含まれてしまう。話しことばでごく一般に用いられ、それが使用されたからといってくだけているという印象を与えない形（例：んです）が存在することを説明する際に「くだけた」と言うと「改まりに欠ける」というニュアンスが感じられ、誤解が生じる可能性がある。このような理由から本稿ではニュートラルな意味を持つ「転訛形」を用いることにする。

転訛形についての実証的な研究の先駆けには、土岐（1975）がある。土岐（1975）はテレビの教養番組をデータとして、縮約形の現れ方を調べ、「一概に『速く話した時に縮約形が多く使われる』とは言えない」、また、「正式な場面にも縮約形の存在することが認められる」ため、「日本語学習者が学習目標としなければならぬ」（土岐 1975：66）と述べている。堀口（1988）は４つのテレビ番組と９つのラジオ番組（約400分）、52名（延べ54名）

を対象に、縮約形とその文法とを関連させながら、日本語教育に縮約形をどのように取り入れるべきか考察している。土岐（1975）、堀口（1988）では、データに現れた縮約の現象を扱っているが、川端（1992）は、新聞、テレビ番組、日本語教科書だけでなく作例も用いながら、幅広く縮約形の形態を提示している。

上原・福島（2005）は、丁寧体の会話における原形と転訛形、双方の生起割合を調べ、それによって丁寧体基調の会話における転訛形の使用実態とその丁寧さ[1]を明らかにしている。また、転訛形を文法的な違いによって分け、その使用状況も調査している。例えば、原形「では」に対する転訛形は「じゃ」であるが、接続詞の場合、否定が後続する場合（例：学生じゃない）、名詞に後続する複合助詞の場合（例：筑波大学じゃよくあることだ）のように文法的な違いによってわけて分析することにより、より詳細な考察を行っている。

特定の音声転訛現象についての研究には、前川（2002）、小磯他（2005）等があるが、日本語母語話者による広範囲の音声転訛の使用実態と改まりについて、原形と転訛形、両者を調べた研究としては堀口（1989）と上原・福島（2005）があるのみである。ただし、前述したように、上原・福島（2005）の研究は８名のデータであり、また、堀口（1988）の研究は延べ54名を対象にしているが、使用者率については言及がない。使用実態を明らかにするには、調査対象人数を広げ、使用者率も考慮すべきであると考える。

そこで本研究では、40名の対象者のデータを基に堀口（1988）と上原・福島（2005）を参考にし、原形と転訛形、文法の違いによる分析を行うことにした。また、日本語教育への応用を考えると多くの表現を扱うことが望ましいため、堀口（1988）及び川端（1992）に挙げられている縮約形を参考に分析対象の表現を選定した。原形と転訛形の丁寧度を調べるためには、丁寧体基調の会話だけでなく、普通体基調の会話についても同時に調査する必要があるが、一般にくだけた話し方だと見なされる音声転訛が、改まりが要求される場（初対面のインタビュー場面）においてさえ、どの程度起こるのかを調べてみることで、各転訛形の改まり度[2]が測れると考え、本稿では丁寧体の会話を考察の対象とした。

日本語母語話者の丁寧体の話しことばをデータとして、本稿で明らかにしたいことは、次の３点である。

１．丁寧体基調の話しことばにおいてどのような音声転訛が見られるのか
２．転訛形は原形に対してどの程度使用されているのか（それぞれの形の使用率、及び使用者率を調べる）
３．原形と転訛形は、改まり度という点においてどのような機能を果たしているのか

３．分析データについて

本稿では、OPIの形式で収集された上村コーパス[3]の内、国際基督教大学の在学生と学外の社会人40名（日本語母語話者）をインタビュイーとして行われた会話データを使用した。

インタビュイーの男女の内訳は男性12名、女性28名、年齢は10代２名、20代20名、30代７名、40代６名、50代２名、60代２名である。東京出身者は40名中15名だが、全員が共通語で話している。会話時間は各15分程度（40組）である。

インタビューデータは、会話モードとロールプレイモードで構成されているが、本稿で分析対象としたのは、会話モードの部分である。ロールプレイは与えられた役割で演じる会話であるため、データ協力者の実際の使用実態と異なる可能性があると判断し、考察対象から外した。また、同一のインタビュアーが複数のインタビュイーにインタビューしていることもあるため、インタビュアーの発話部分は分析対象とせず、インタビュイーの発話部分だけを分析の対象とした。

４．結果

分析にあたっては、原形と転訛形の使用数とその割合だけでなく、原形と転訛形それぞれの使用者率（全40名中の割合）についても調査した。また、堀口（1988）及び上原・福島（2005）において調査されている転訛形については、その使用割合を参照し、本データでの結果との比較を行った。尚、原形と転訛形の数を合わせて20例以下の場合は、表の該当部分に網掛けがしてある。

４．１　撥音化

４．１．１　のだ→んだ，ので→んで，もの→もん

４．１．１では、音の変化によって撥音「ん」になるもののうち、「の→ん」の変化について扱う。「のだ」の転訛形「んだ」は次頁の表１のような結果になった[4]。使用率も堀口（1988）及び上原・福島（2005）と同じような割合になった。「のだ」類は、転訛形が約90％の割合で使用されていること、及び原形の使用者率も低いことから、上原・福島（2005）も指摘しているように話しことばでは「んだ」が基本になっていると言っていいだろう。

また、否定が後続する場合「では」が「じゃ」と融合されなければ「の」もそれに連動して融合されず「のではない」となり、「じゃ」と融合されれば「んじゃない」となっていた。「のでは（ない）」に関して言えば転訛が連動して生じていた。

接続助詞「ので」の転訛形「んで」の使用率は、次頁の表２に見られるように原形「ので」を上回らず、25.5％であった。学会講演・模擬講演というより改まった場のデータを分析した小磯他（2005）においても、本データと同様の数字（25.59％）が出ている。ただし、堀口（1988）では、「んで」の割合が58％で原形を上回っていた[5]。「んで」の使用率が原形を上回るのか否かはデータによって異なるが、先行研究と本データ共に接続助詞の「んで」はある程度使用されていることから、丁寧体基調の話しことばにおいて転訛形「んで」が使用されても、改まり度が極端に落ちるわけではないということが言えそうである。

「ものです/だ」が「もんです/だ」となる変化は（例⑶参照）、本データでは、原形の「ものです/だ」のほうが転訛形よりも使用率が高いという結果になった。その一方で、転訛形の「もんです/だ」も使用率が30％あり、使用者率も同程度であることから、「ものです/だ」が「もんです/だ」に転訛するとやや改まりに欠けることがうかがえる。しかし、堀口（1988）のデータでは「もんです/だ」が80％で、転訛形の使用率が非常に高い。データによって転訛形の割合が異なるので、「もんです/だ」と原形の「ものです/だ」のどちらが多く使用される形式なのか判断するには、さらなる調査が必要である。

⑶　外国人の生徒と、やっぱり視点が違うもんですから、こちらはこれで分かるだろうと思って、言っても向こうでは全然、向こうとしては全然ピンとこなかったり　（NJ22M）[6]

ちなみに、データに見られた「ものだ」類の意味用法は、「過去の回想」と「当然」を表す用法がそれぞれ１回のみで、他は全て例⑶に見られるように「もの（もん）ですから，もの（もん）だから，もの（もん）で」のように理由を表す用法であった[7]。

名詞の「物/もの」（「者」にあたる使用例はなかった）の転訛形「もん」は先行研究では取り上げられていない。本データ（表３参照）では名詞「物/もの」は98例全て原形が用いられ、「もん」と転訛する例は見られなかった。丁寧体基調の話しことばにおいては、名詞の「もの」の音声転訛は起こりにくいようである。

「（ので→）んで」「（もの→）もん」という同様の音声転訛であっても、その文法的な違いによって使用頻度は異なっている。従って、それぞれの言語形式から受ける転訛形の改まり度も異なってくることは、学習者への説明が必要であろう。

表１．のだ→んだ

	使用者率（人数）	使用率（総数）
のです/のでしょう	7.5％（　3）	0.4％（　4）
んです/んでしょう	100.0％（ 40）	99.6％(904)
のだ/のだろう	10.0％（　4）	9.8％（　4）
んだ/んだろう	47.5％（ 19）	90.2％（ 37）
のではない	15.0％（　6）	100.0％（　9）
んではない	0.0％（　0）	0.0％（　0）
のじゃない	0.0％（　0）	0.0％（　0）
んじゃない	67.5％（ 27）	100.0％（ 58）

NB.「では（じゃ）ない」は丁寧形、過去形も含む。

表２．ので→んで

	使用者率（人数）	使用率（総数）
ので［接続助詞］	95.0％（ 38）	74.5％(289)
んで［接続助詞］	65.0％（ 26）	25.5％（ 99）

表３．もの→もん

	使用者率（人数）	使用率（総数）
ものです/ものだ	35.0％(14)	67.3％(32)
もんです/もんだ	25.0％(12)	2.6％(15)
もの［名詞；高いもの］	77.5％(31)	100.0％(98)
もん［名詞；高いもん］	0.0％（ 0）	0.0％（ 0）

NB.「もの（もん）です/だ」はその否定形も含む。
上原・福島（2005）では取り上げられていない。

4.1.2　なにか→なんか，なにも→なんも

ここでは「(な) に → (な) ん」となる形を見ていく。「なにか」に対する「なんか」は、「なにかご意見はありますか」のような疑問詞と、「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない、発話の一文を埋める音声現象」(山根 2002 : 49) のフィラーがあるが、上原・福島 (2005) ではこの 2 つを区別していない。

表 4．なに→なん

	使用者率 (人数)	使用率 (総数)
なにか [疑問]	37.5%(15)	65.6%(21)
なんか [疑問]	17.5%(7)	34.3%(11)
なにか [フィラー]	22.5%(9)	9.2%(16)
なんか [フィラー]	77.5%(31)	90.8%(158)
なにも	7.5%(3)	100.0%(3)
なんも	0.0%(0)	0.0%(0)

NB.「なにか」に対応しない「なんか (例：私なんかはそう思います)」は含まない。

本データでは、フィラーの「なんか」の使用率は90.8%と「なにか」を大きく上回っており、その使用によって改まりの度合いが下がるという印象を与えることはないと言えよう。フィラーは形式として固定化されているため使用頻度が高いのだと考えられる。一方、疑問詞の場合、実質的な意味をもつためか、原形「なにか」の使用率のほうが高いという結果になった。

「なにも」に対する「なんも」はデータ数が少ないため、確かなことは言えないが、転訛形「なんも」は 1 例も見られなかった。

4.1.3　Vらない/Vれない→Vんない，Vる (の)→Vんの

「ら (ない)，れ (ない)，る」が「ん」となる現象は、縮約形の先行研究や日本語教科書でもよく取り上げられる形であるが、本データではほとんど使用されないという結果になった。これら転訛形は、くだけた印象を与えてしまうため、本データのように丁寧体基調の会話では、ほとんど使用されないものと考えられる。

表 5．ラ行動詞→ん

	使用者率 (人数)	使用率 (総数)
(わか)らない	70.0%(28)	92.5%(62)
(わか)んない	5.0%(2)	7.5%(5)
(かもし)れない	40.0%(16)	100.0%(27)
(かもし)んない	0.0%(0)	0.0%(0)
(どうなって)る(の)	37.5%(15)	96.2%(25)
(どうなって)ん(の)	2.5%(1)	3.8%(1)

NB. 上原・福島 (2005) では、「ら→んない」の転訛形の生起率は55%で本データ7.5%と異なる結果であった。その他は本データとほぼ同様の結果となっている。堀口(1988) には使用率の言及はない。

4.1.4　のような/に→んな/に

「こ/そ/あ/どのような/に」の転訛形「こ/そ/あ/どんな/に」については、表6に見られるように、上原・福島（2005）と同様、本データにおいても転訛形の使用が基本となっていることがうかがえる。原形「こ/そ/あ/どのような/に」は、初対面のインタビュー場面においても改まりすぎる形式であると考えられる。

4.1.5　のところ→んところ

「～のところ」が「～んところ」となる変化については、堀口（1988）で転訛形の数が取り上げられているが、割合については示されていない。本データでは、数が少ないため断定はできないが、転訛形の使用率は高くなく、「～んところ」と発話すると、ややくだけた印象を与えると言えそうである（表7参照）。参考までに、講演・講義のデータを調査した小磯他（2005）における転訛形の生起率はさらに低く、7％（155例中11例）であった。また、「ところ」の直前の「の」が撥音化する場合、「んとこ」というように「ところ」の「ろ」の脱落が見られた。ここでも音声転訛の連動が起こっている。似た転訛形として「(私) のうち→（私）んち」があるが、「のうち」が1例、「んち」は0例だった。

表6．のような/に→んな/に

	使用者率（人数）	使用率（総数）
こ/そ/あ/どのような/に	5.0%(2)	2.8%(2)
こ/そ/あ/どんな/に	60.0%(24)	97.2%(69)

NB.「んな/に」に対応しない「のような/に」は含まない。

表7．のところ→んところ

	使用者率（人数）	使用率（総数）
のとこ（ろ）	22.5%(9)	77.8%(14)
んとこ（ろ）	7.5%(3)	22.2%(4)

NB. 上原・福島（2005）では考察対象外。

4.1.6　その他の撥音化

4.1.6では、語の撥音化についてまとめたい。語の撥音化には、表8に挙げられるものが見られた。縮約形（「いろんな」）もあれば、撥音が追加された拡張形（「みんな，あんまり，おんなじ」）もあり、さらに音が変化した形（「おんなし」）もある。語によって使用率は様々で、転訛形が基本となっている「みんな」、または、基本と言えるほど使用されている「いろんな」のように使用率が非常に高いものから、原形と転訛形で使用率が拮抗しているもの（「あんまり」）、転訛形の使用割合が非常に低いもの（「おんなじ，おんなし」）まで多様であった。

表８．いろいろな→いろんな，みな→みんな，あまり→あんまり，おなじ→おんなじ，おんなし

	使用者率（人数）	使用率（総数）
いろいろな	15.0％(6)	22.2％(10)
いろんな	47.5％(19)	77.8％(35)
みな	2.5％(1)	3.0％(1)
みんな	45.0％(18)	97.0％(32)

	使用者率（人数）	使用率（総数）
あまり	57.5％(23)	56.5％(65)
あんまり	47.5％(19)	43.5％(50)
おなじ	27.5％(11)	73.9％(17)
おんなじ	5.0％(2)	13.0％ (3)
おんなし	2.5％(1)	13.0％(3)

4．2　単音の脱落

4．2．1　けれども→けれど，けども，けど

「けれども」の転訛形「けど」は、原形と同じく40％程度の使用率だった（上原・福島(2005）では83％、堀口（1988）では調査されていない)。「けれども」に比べれば「けど」は音数も短く、くだけた表現に見えるが、使用者率の高さも考慮すると、丁寧体の話しことばにおいては、改まりに欠ける形としては認識されていないと考えられる。

表９．けれども→けれど，けども，けど

	使用者率（人数）	使用率（総数）
けれども	82.5％(33)	39.8％(320)
けれど	57.5％(23)	11.9％(96)
けども	40.0％(16)	8.3％(67)
けど	95.0％(38)	39.9％(321)

4．2．2　ている→てる

「ている」類の「い」音の脱落は先行研究と同じく、いずれも転訛形が原形の使用を上回っており、改まり度が落ちることのない形として使用されていると見ていいだろう。

表10．ている→てる

	使用者率（人数）	使用率（総数）
ています※	62.5％(25)	27.8％(59)
てます※	90.0％(36)	72.2％(153)
ている※	82.5％(33)	45.8％(162)
てる※	90.0％(36)	54.2％(192)

	使用者率（人数）	使用率（総数）
ていない※	22.5％(9)	27.7％(13)
てない※	65.0％(26)	78.3％(47)
ていて	32.5％(13)	41.7％(20)
てて	42.5％(17)	58.3％(28)

NB. ※は過去形を含む。

4．2．3　ていく→てく

「ていく→てく」は「ている」の「い」音の脱落よりも使用率は高くないという結果で

あった（表11参照）。「ていく」類が「てく」となると、ややくだけた印象を与えるものと考えられる。「ていく」は、上原・福島（2005）では取り上げられていないが、堀口（1988）における使用割合は、本データとほぼ同じであった。

4.2.4　ところ→とこ

転訛形「とこ」の使用率は、20％弱と高くないことから、「とこ」は丁寧体の話しことばにおいては、ややくだけた印象を与える形であると言える（表12参照）。

表11．ていく→てく

	使用者率（人数）	使用率（総数）
ていきます※/ていく※/ていって	50.0％(20)	77.8％(28)
てきます※/てく※/てって	15.0％(6)	22.2％(8)

NB. ※は否定形，過去形，過去否定形を含む。

表12．ところ→とこ

	使用者率（n=40）	使用率（総数）
ところ	70.0％(28)	81.5％(88)
とこ	27.5％(11)	18.5％(20)

NB. 先行研究では考察対象外。

4.3　促音化

4.3.1　と→って

「と」が「って」と促音化する現象については、音の減少ではないため、縮約形ではないとされるが、上原・福島（2005）では「拡張形」として取り上げられている。ただし、上原・福島（2005）では、本動詞が後続する場合と名詞に後続する場合のみ考察されており、堀口（1988）では「という→って」の変化のみ取り上げられている。文法的なふるまいによって転訛形の使用率も変わってくるため、本稿ではさらに細かく分けて分析した。

本動詞（言う，思う，決めるなど）が後続する場合の「って」の使用は、表13に見られるように13.5％とそれほど高くはなかった。その使用率の低さから、「って＋本動詞」はやや改まりに欠ける印象を与えるものと考えられる。

表13．と＋本動詞→って＋本動詞

	使用者率（人数）	使用率（総数）
と＋本動詞	100.0％(40)	86.3％(424)
って＋本動詞	65.0％(26)	13.5％(66)

上原・福島（2005）では「って」は52％。

表14．という。/と。→っていう。/って。

	使用者率（人数）	使用率（総数）
という［文末］	30.0％(12)	46.5％(20)
っていう［文末］例⑷	30.0％(12)	53.5％(23)
と［文末］	22.5％(9)	88.2％(15)
って［文末］例⑸	5.0％(2)	11.8％(2)

NB.「って」が「て」と発話されることもある。

「という」や「と」が文末にくる用法がある。発話例⑷と⑸はその転訛形「っていう」と

「って」の例である。「っていう」は促音が発音されずに「ていう」となる場合もある。表14のように、文末の「っていう」は使用率も「という」を上回っている。また、下の表15でもわかるように「という」の転訛形「っていう」は、丁寧体の話しことばにおいては、原形と同程度に使用される形式であると言える。

⑷　あの、鈍行と言うか あの、新快速とかありますよねえ あんまり速くないけど、まあ、少し速いっていう。（NJ17F）
⑸　嫌いだったのが好きになったもんでそれを人にも教えたいなって（NJ2M）

上原・福島（2005）では「という」は名詞が後続する場合のみ調査されているが、本稿では、「という詩人」（例⑹）のように名詞が後続する場合、「というの/こと/わけ/よう/ふう/より/だけ/ほど」のように形式名詞やそれに類する語が後続する場合、そして、さらに縮約されて「って」になる場合に分けて分析した（表15参照）。例⑹⑺はそれぞれ「っていう＋名詞」、「って＋形式名詞」の例である。

⑹　高橋ムツオ、という詩人が書いた友達の作り方、っていう本がありまして。（NJ22M）
⑺　会社から来たようなものはあの、返すってわけにもいかなくて（NJ1F）

表15．という～→っていう～，って～

	使用者率（人数）	使用率（総数）
という＋名詞	67.5%(27)	39.4%(67)
っていう＋名詞	82.5%(33)	56.5%(96)
って＋名詞	12.5%(5)	4.1%(7)
という＋形式名詞	80.0%(32)	45.2%(170)
っていう＋形式名詞	92.5%(37)	51.3%(193)
って＋形式名詞	17.5%(7)	3.5%(13)

NB.「って」が「て」と発話されることもある。

表16．というのは→っていうのは，ってのは，って

	使用者率（人数）	使用率（総数）
～というのは	27.5%(11)	22.5%(20)
～っていうのは	57.5%(23)	59.6%(53)
～ってのは	7.5%(3)	3.4%(3)
～って	25.7%(9)	14.6%(13)

NB.「って」が「て」と発話されることもある。

表15からもわかるように、名詞や形式名詞が後続する場合、「という」よりも転訛形「っていう」の使用率のほうが高く、「っていう」はくだけた印象を与えずに使用できる形式として固まっていると言えそうである。一方、さらに短縮した形の「って」は使用率が極端に落ちる。形の上でも原形とは大きく異なり、それ故、くだけた印象を与えるものと考えられる。

次に、主題を表す「というのは」の類いについて見ていく（表16参照）。例⑻は転訛形

「っていうのは」を用いて、現在の住まいについて述べている発話である。

⑻　短所っていうのは、ふふ、私にとっては遠いぐらいのもの。（NJ13F）

本稿で、「というのは」を「という＋形式名詞」と別に立てたのは、「というのは」が「っていうのは」という形になる以外に「ってのは」「って」となる場合もあるからである。表16の結果からもわかるように、「というのは」が「っていうのは」に音声転訛することは、名詞や形式名詞が後続する場合と同様、丁寧体の話しことばにおいては改まり度が下がることなく頻繁に使用される形式であると言える。しかし、さらに音声転訛した形、つまり原形から遠い形である「ってのは」の使用率は3.4％と極端に下がっている。このことから、原形から大きく変化した形はくだけた印象を与えるものと捉えられていると考えられる。一方、「ってのは」よりも転訛した形の「って」の使用率・使用者率が上がるのは、「って」のほうが文法化が進んでいるためであろう。

4. 3. 2　というか→っていうか，なんというか→なんていうか（フィラー）

表17は、フィラーと呼ばれる表現である。いずれも転訛形の使用率は高く、特に「なんていうか」に関しては、原形の使用は皆無であった。フィラーは、4.1.2「なんか」でも述べたように、表現として固定されているため、転訛形が含まれる表現が使用されたからといって改まりに欠けるわけではないということが言えそうである。

表17．というか→ていうか（フィラー）

	使用者率（人数）	使用率（総数）
というか	55.0％(22)	48.0％(59)
（っ）ていうか	70.0％(28)	52.0％(64)
といいますか	15.0％(6)	57.9％(11)
（っ）ていいますか	17.5％(7)	42.1％(8)
なんというか	0.0％(0)	0.0％(0)
なんていうか	42.5％(17)	100.0％(44)

NB.「（なん）と/ていうのか（な）」「（なん）と/ていうんでしょうか」などの形も含む。先行研究では調査対象外。

表18．こ/そ/あ/どちら→こ/そ/あ/どっち

	使用者率（人数）	使用率（総数）
こ/そ/あ/どちら	52.5％(21)	63.2％(43)
こ/そ/あ/どっち	32.5％(13)	36.8％(25)

NB. 先行研究では調査対象外。

4. 3. 3　こ/そ/あ/どちら→こ/そ/あ/どっち

「こ/そ/あ/どちら」が「こ/そ/あ/どっち」となる変化は、使用者率、使用率ともに30％

を超えており、かなり頻繁に使用されるが、原形を上回るほどではない（表18参照）。このことから、やや改まりに欠けるものとして認識されているといえよう。特に、挨拶に使用される「こちらこそ（NJ8F）」は定型表現であるため、「こっちこそ」と言うと非常にくだけた印象を与える。同様に、出身地を尋ねる場合に「どっちのご出身ですか」とは言いにくい。「出身」は聞き手の領域（鈴木 1997）に関わる事柄であるため、転訛形を用いるとくだけた印象を与え、初対面場面にはふさわしくないと判断されるのだろう。

4.3.4　その他の促音化

その他の促音化としては、「やはり」の拡張形「やっぱり」、及び、縮約形「やっぱ」、「（高/な）くて」の拡張形「（高/な）くって」、「いつも，すごく，とても」のように強調されて拡張形となるものが挙げられる（表19、表20参照）。

「やっぱり」は使用者率も使用率も原形を上回っており、丁寧体の話しことばにおいて使用されても改まりの度合いが著しく下がるものではないと認識されているようである。「やっぱり」はフィラーとして用いられることもあり、表現として固定されているためであろう。それに対して、「やっぱ」は原形から形の上でも大きく異なっており、使用者率・使用率が共に非常に低いことから、くだけた印象を与える表現だと考えられる。

強調の場合に追加される促音については「くて→くって」の変化が使用率14％であり、それほど高くなかった。また、「いつも，すごく，とても」については「とっても」のみが観察された。強調を表す際の促音の追加は本データでは使用頻度がいずれも低かった。

表19．やはり→やっぱり，やっぱ

	使用者率（人数）	使用率（総数）
やはり	50.0％(20)	35.8％(97)
やっぱり	77.5％(31)	62.4％(31)
やっぱ	7.5％(3)	1.8％(5)

NB.「やっぱし」は観察されなかった。

表20．促音「っ」の追加

	使用者率（人数）	使用率（総数）
～くて	85.0％(34)	86.0％(104)
～くって	20.0％(8)	14.0％(17)
いつも，すごく，とても	60.0％(24)	97.2％(173)
とっても	12.8％(5)	90.2％(37)

その他の促音化の形として「（食べ）ても/（学生）でも」が「（食べ）たって/（学生）だって」となる現象があるが、原形87回に対し「Nだって」が１回だけ観察された（例(9)）[8]。その使用率の低さ（１％）から、くだけた印象を与えるものとして認識されていると言えよう。

(9)　彼らだって元々ごく普通の人達で（NJ15F）

4.4　拗音化

4.4.1　では→じゃ

「では」が「じゃ」となるのは、接続詞の場合、否定が後続する場合、名詞に後続する複合助詞の場合（例：筑波大学では）の３つがある。接続詞の場合はデータでは「じゃ」が基本形となっており、原形「では」の使用は皆無だった。否定が後続する場合は転訛形の使用のほうが大きく上回っており、「じゃ＋否定」は話しことばにおいては改まりに欠けることなく使用される形として固まっていると言っていいだろう。

一方、複合助詞の場合、転訛形はくだけた印象を与えることが、使用者率・使用率の低さから判断できる。上原･福島（2005）でも同様の結果が出ており、文法的な違いによって転訛形の使用率に差があるのは興味深い。学会講演、模擬講演のデータを用いた前川（2002）においても、否定が後続する場合のほうが名詞に後続する場合よりも「じゃ」と融合される割合が高く、さらに改まりの程度が低くなる模擬講演のほうが学会講演よりも「じゃ」の使用率が高くなることを指摘している。

表21．では→じゃ

	使用者率（人数）	使用率（総数）
（それ）では［接続詞］	0.0％（　0）	0.0％（　0）
（それ）じゃ［接続詞］	40.0％（ 16）	100.0％（ 21）
では＋否定	65.0％（ 26）	33.9％（ 62）
じゃ＋否定	90.0％（ 36）	66.1％（121）

	使用者率（人数）	使用率（総数）
名詞＋では［複合助詞］	72.5％（ 29）	94.2％（ 65）
名詞＋じゃ［複合助詞］	5.0％（　2）	5.8％（　4）

NB.「じゃ」は「じゃあ」と発話されることもある。

4.4.2　てしまう→ちゃう

「てしまう」の転訛形「ちゃう」は、本データ（表22参照）では使用率35.6％とそれほど割合が高くなく、使用者率も原形の使用者率の半分だった。上原・福島（2005）では使用率90％以上であるが、総数が34例と少ない。堀口（1988）では、転訛形の使用率は68％（123例中84例）と高いが使用者が限られていたという記述がある。本データに限って言えば、「ちゃう」はその使用率・使用者率から、やや改まりに欠けるものと認識されていたと考えられる。しかし、断定するにはさらに多くのデータによる検証が必要である。

4.4.3　～ては→～ちゃ

「（食べ）ては（いけない等）」の転訛形「ちゃ」は、4.4.2「ちゃう」と同様、くだけた表現と捉えられているものと推測できる（表23参照）。しかし、データ数が少ないため、現時点では断定することはできない。

表22．てしまう→ちゃう

	使用者率（人数）	使用率（総数）
てしまう	70.0％(28)	64.4％(65)
ちゃう	37.5％(15)	35.6％(36)

NB.　丁寧形、過去形、否定形も含む。

表23．ては→ちゃ

	使用者率（人数）	使用率（総数）
～ては	17.5％(7)	61.5％(8)
～ちゃ	12.5％(5)	38.5％(5)

NB. 上原･福島（2005）では考察対象外。
堀口（1988）では33％で、本データの結果と近い。

4.4.4　なければ→なけりゃ，なきゃ

「なければ」は「なけりゃ」と変化する場合と「なきゃ」の場合がある。堀口（1988）では、「なきゃ」の使用率は72％（39例中28例）で、「なけりゃ」は１例のみという結果であった。本データは原形、転訛形あわせて20例と少ないため断定はできないが、「なきゃ」に関しては、堀口（1988）の結果と同様に原形を上回る使用率であることから、丁寧体基調の話しことばにおいて、その使用が著しくくだけた印象を与えるものではないということが言えそうである（表24参照）。

4.4.5　こ/そ/あれは→こ/そ/ありゃ

「こ/そ/あれは」が「こ/そ/ありゃ」となる例は「そりゃ」が２例のみで非常に少なく、「こ/ありゃ」の例はなかった（表25参照）。

表24．なければ→なけりゃ，なきゃ

	使用者率（人数）	使用率（総数）
なければ	20.0％(8)	45.0％(9)
なけりゃ	0.0％(0)	0.0％(0)
なきゃ	25.0％(10)	55.0％(11)

NB. 上原･福島（2005）では考察対象外。

表25．こ／そ／あれは→こ／そ／ありゃ

	使用者率（人数）	使用率（総数）
こ/そ/あれは	80.0％(32)	98.3％(116)
そりゃ	5.0％(　2)	1.7％(　2)

NB. 上原･福島（2005）では考察対象外。堀口（1988）では、「こりゃ　３％」「そりゃ　25％」「ありゃ　０％」。

川端（1992）で提示されている、その他の拗音化の形である「連用形＋は＋しない」「仮定形＋ば＋いい」（例：読みゃ，作りゃ,高きゃ，高けりゃ）や「ナ形容詞の語幹＋には」（例：静かにゃ）は１例も観察されなかった。いずれも「なけりゃ」「こりゃ」などと同様、現代日本語の話しことばにおいては使用される頻度が非常に低いものであると考えられる。その他、拗音化ではないが「てあげる」の転訛形「たげる」も使用例がなかった。

5．考察

ここでは、４節で述べた結果をまとめ、改まり度と学習者への指導の際に留意すべき点

について考えたい。4 節の結果から丁寧体基調の話しことばにおける転訛形の使用は次の 4 つのレベルにまとめられる。矢印の元が原形、先が転訛形である。尚、先行研究と本データで使用率が大きく異なるものには「？」を、データ数が少ないものには△を付けた。

1．転訛形が基本（90％以上）

撥音化	のだ類→んだ類，こ/そ/あ/どのような/に→こ/そ/あ/どんな/に， なにか→なんか [フィラー]，みな→みんな
音の変化	なんというか→なんていうか [フィラー]
拗音化	（それ）では→（それ）じゃ [接続詞]

2．転訛形が原形を上回る/同程度（50％～80％程度）

撥音化	いろいろな→いろんな，あまり→あんまり，
単音の脱落	けれども→けど，ている類→てる類
促音化	という→っていう [文末]，というのは→っていうのは， という＋名詞/形式名詞→っていう＋名詞/形式名詞， というか/といいますか→っていうか/っていいますか [フィラー]， やはり→やっぱり
拗音化	では＋否定→じゃ＋否定，△なければ→なきゃ，？てしまう→ちゃう

3．転訛形の使用率が原形を上回らない（15％～40％程度）

撥音化	？ので→んで [接続助詞]，？ものだ類→もんだ類， なにか→なんか [疑問詞]，△のところ→んところ，おなじ→おんなじ
単音の脱落	ていく→てく，ところ→とこ
促音化	と＋本動詞→って＋本動詞，と→って [文末]，というのは→って， こ/そ/あ/どちら→こ/そ/あ/どっち，くて→くって
拗音化	？てしまう→ちゃう，△～ては→～ちゃ

4．転訛形の使用率が非常に低い（0％～5％程度）

撥音化	もの→もん [名詞]，△なにも→なんも， Ｖら/れ/る(ない)・～る(の)→Ｖん(ない)・～ん(の)
促音化	という＋名詞/形式名詞→って＋名詞/形式名詞， というのは→(っ)てのは，やはり→やっぱ，とても→とっても， △(食べ) ても/(学生)でも→(食べ)たって/(学生) だって
拗音化	名詞＋では→名詞＋じゃ[複合名詞]，△なければ→なけりゃ， こ/そ/あれは→こ/そ/ありゃ

1は転訛形が専ら使用される形式である。原形が用いられると、「初対面のインタビュー」という場面よりも改まったかたい印象を与えてしまうものと考えられる。2は原形を上回るか同程度使用されている転訛形である。このことから、この転訛形が使用されたからといって改まりの程度は落ちないと判断できよう。3は転訛形の使用割合は比較的高いが原形を上回る程ではないものである。従って、改まり度はやや落ち、くだけた印象を与えると考えられる。4は転訛形の割合が非常に低い。そのため、これらの表現は改まりに欠け、くだけすぎているという印象を与える可能性があると考えられる。

特徴としては、「やっぱ」「ってのは」のように原形から大きく形が異なっているものは改まりの度合いが落ちやすいと言える。他方、フィラーのように表現が固定されており、話し相手に向かって直接発話されたものではない場合、転訛形を含んでいたとしても、くだけた印象を与えることはないと言えるだろう。さらに、「ん＋じゃ＋ない」「ん＋とこ」のように一箇所で音声転訛が起こると、続く要素も同時に音声転訛が起こるという現象が観察された。

学習者に対して留意すべきことは、音声転訛がどれも一様に改まりに欠ける印象を与えるわけではないということである。レベル1～4で示したように形式によって改まり度に差があるということ、また、「では→じゃ（接続詞の場合、否定が続く場合、名詞に後続する場合）」「もの→もん（文末のモダリティ形式の場合、名詞の場合）」のように、同様の変化をしていても、文法的な違いによって使用率は異なり、改まり度にも差が出てくるということは学習者への説明が必要である。さらに「というのは」に対する「っていうのは，ってのは，って」、「という+名詞/形式名詞」に対する「っていう＋名詞/形式名詞，って＋名詞/形式名詞」のように、原形に対していくつかの転訛形が存在する場合、その改まり度は一様ではないということも学習者に説明すべき点であると言えよう。聞き取りの側面からは、音声転訛が起こっている場合の形と意味の認識ができることが大切である。特に転訛が連続する場合は元の形が捉えにくくなるので注意が必要である。また、それぞれの転訛形の改まり度を知っておくことは、場の改まりを判断する指標にもなる。

対人関係上の効果という点から転訛形を見ると、転訛形は原形に比べ、総じてくだけた、カジュアルな印象を与えるため、丁寧体基調の話しことばにおいてそれを使用することで親密さを演出することが可能である。特に、改まりの程度が極端に落ちない形であるレベル1～3のような転訛形を、丁寧体基調の会話において用いることは、くだけ過ぎているという印象を与えずに音のレベルで親密さを表現することができると思われる。筆者自身が教授した学習者の中には、転訛形を用いると失礼な印象を与えると信じ、先生には使わないし使ってはいけない、と言う者もいた。学習者自身が、発話場面の状況から改まりと親密さについて判断でき、転訛形を効果的に使用できるよう指導することも、話しことば教育には大切である。本稿の考察から得られた4つのレベルは、その指標となると考えら

れる。

６．今後の課題

本稿では、日本語母語話者40名の丁寧体基調の会話（初対面のインタビュー場面）をデータとして、どのような転訛音声が見られるのか、そしてそれらの転訛形は原形に対してどの程度使用されているのか、また、転訛形の使用と改まり度の関係について考察した。今後の課題は、学習者の日本語能力別の使用状況についても調査し、習得の状況、及び、指導の際の留意点について考察を深めていくことである。

さらに、学習者が転訛形をうまく使えないことによって評価が下がるということはあるのか、逆にうまく使用したことによって親密さが表されコミュニケーションが円滑に進むのかといった「評価」の側面について調査することも今後の課題としたい。

注

⑴　上原・福島（2005）では、縮約形及び拡張形を「丁寧」ということばを用いて説明しているが、「丁寧」は相手に対する気遣いという広い意味を持つ（Brown & Levinson 1987）ため、本稿ではより意味範囲の狭い「改まり」を用いることにした。

⑵　本稿では、初対面のインタビュー場面を改まりが要求される場面とし、この場面における、各転訛形の使用頻度に応じて改まりの度合いを調べた。本稿で扱った場面は、転訛形の改まり度を認定する指標の一つとはなり得るが、より厳密には改まりの異なる場面について転訛形の使用頻度を調べ、その変化を見る必要がある。今度の課題としたい。

⑶　平成 8-10年度文部省科学研究費補助特定領域研究「人文科学とコンピュータ」公募研究（「日本語会話データベースの構築と談話分析」研究代表者　上村隆一）の成果によるものである。

⑷　上原・福島（2005）では「ので（は）じゃ（ある/ない）」、「んで（は）じゃ（ある/ない）」のように挙げられているが、本データで「のじゃない」「んではない」という形の使用例はなかった。堀口（1988）においても同様の結果が示されている。

⑸　上原・福島（2005）は「ので：18％，8例」「んで：82％，9 例」、堀口（1988）は「ので：42％，54例」「んで：58％，73例」と「んで」の使用率が原形を上回っており、本データと異なる結果だが、いずれも本データ（397例）と比べると総数が少ない。

⑹　NJ22Mは発話者記号である。NJはNative Japanese、数字はインタビュイーの番号、Mは男性を示している。Fの場合は女性である。下線は該当部分を筆者が引いたものである。本稿の会話例は、全て上村コーパスの書き起こしデータを引用している。

⑺　堀口（1988）にも同様の指摘がある。

⑻　堀口（1988）では、使用率の言及はないが、42例が観察されている。

参考文献

上原聡・福島悦子（2005）「やっぱ、丁寧に話しちゃいますんで―丁寧体の会話におけるくだけた表現の使用―」『言語学と日本語教育Ⅳ』くろしお出版：61-72

大坪一夫（1982）「縮約形」『日本語教育辞典』大修館書店：51-52

川瀬生郎（1992）「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学留学生センター紀要』第2号，東京大学留学生センター：1-24

小磯花絵・間淵洋子・前川喜久雄（2005）「助詞の撥音化現象：『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声転訛現象の分析」『人工知能学会研究会資料　言語・音声理解と対話処理』、人工知能学会：7-12

齋藤純男（1991）「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』第6号，東北大学教養部：89-97

鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」『視点と言語行動』くろしお出版：45-76

土岐哲（1975）「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28号：55-66

堀口純子（1988）「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文藝言語研究言語篇』15号，筑波大学文芸・言語学系：30-39

前川喜久雄（2002）「『日本語話し言葉コーパス』を用いた言語変異研究」『音声研究』，第6巻3号：48-59

山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

Brown, Penelope & Levinson, Stephen C.（1987）“*Politeness : Some Universals in Language Usage*”, Cambridge University Press.